

中国残留邦人をどう存じますか？

「中国残留邦人」について皆様に知っていただこうと、広報ちくじょう平成24年12月号で、築上町上別府にお住まいの高橋マズ子さんの手記（抜粋）をご紹介させていただきました。

誌面の都合上、一部しか掲載できていなかったもので、平成25年2月号の広報から3回に分けて掲載してきました（不定期）。今回は第3回目（最終回）です。

問い合わせ 福祉課 社会福祉係（内線243番）

十五歳、戦乱の中国に一人残されて③

その翌年、女の子が産まれました。産後の食事ありません。田に行つて、黄色くなった穂をつんできて、少しづつお粥を炊いて食べていました。間もなく共同生活が始まり、三度の食事を食堂で食べ、家に帰る暇もなく働かされました。今度はスパイ容疑をかけられ、田んぼから二人の民兵に鉄砲を突きつけられ、前の主人の写真を見せられてそう答えると紐できつく縛り上げられました。何十里も離れた公安局に連れていかれ牢にいれられました。その翌日から大勢の犯人たちと、つるはして岩石を掘り始めました。毎日その繰

り返し、ある日、岩石が足に落ちてあんまり血が出るので、病院に行つて治療してもらいましたが、二日後、傷がよくなりませんが、現場に連れて行かれ働かされました。百日岩を掘り続けたある日、明日家に帰つてもいいと言われたときの嬉しき、泣けて泣けてしやうがありませんでした。何の調べも受けず、三カ月以上も牢に入れられ、唯働きさせられた悔しき。家に帰ると、子供たちは一目散にとんで抱きついて来ました。服も顔も真つ黒、どろどろに汚れていました。父親は忙しく、おじいちゃんとはとして目も見えにくいのです。数カ月後、そのおじいちゃん

も亡くなりました。三人の子を抱えて一生懸命働きました。心も体も休まずにただただ働くばかりでした。働くばかりの私にも何時かはいいことが来るのではと心で祈るばかりでした。

ある日、近所のおじいちゃんに息子の嫁になつてくれと言われましたが断りました。三人も子供が居るので「子供は何人でも連れておいで」と言われて再婚しました。主人は県の工場で技術員として働いているので家にはたまにしか帰つてきません。おじいちゃんおばあちゃん子供のため、一生懸命働きました。二人とも相次いで病気になる、川の氷を割つて大小便の汚れ物を洗い、孝行できなかった自分の親と思ひ看病しました。おばあちゃん二カ月、おじいちゃんハカ月寝たきりでした。何もかも配給でした。大人に初が月三十斤、こどもに十八斤、それを背中に担つて大隊の売店に搾りにゆき、おつりて塩を買いました。その塩を包んであった新聞を読んでびっくり、一九七四年に日中国交が回復したと書いてあったのです。それだけ読むとあと涙で読めなくなりました。思わず手を合わせ神に感謝しました。もう何も手につかず人民公社に行き

手続きをしてもらい、日本の兄弟に手紙を書きました。日本語も日本の文字も忘れていましたがそれでも兄弟には通じたようで、間もなく返事と写真まで届きました。夢ではないかと自分の顔をつねって見たほどです。思い出しても涙が出てきます。

一九七九年、親捜して、三十七年振りに祖国の土を踏みました。小倉の駅で姉との再会はただ抱き合つて泣くだけでした。ハカ月故郷の人々の中で甘えて過ごしました。一旦中国に帰りましたが、心はもはや一時も早く日本に帰りたいと落ち着きません。主人も一緒に日本に行くと言つてくれましたが、前から高かった血圧が高くなり、三月八日亡くなりました。子供たちは母一人日本に帰すわけにいかぬ自分たちもついていつて母の面倒を見たいといい日本語の解らない家族五人を引き連れて一九八一年に帰国しました。中国での苦勞を思うとどんな苦勞も我慢できると明るく笑う私ですが、どこの国も侵略してはならないし、どこの国の国民も戦争に巻き込まれるようなことがあつてはならないとしみじみと考えております。

（原文のまま掲載）

完